

フィールド科学者井上治郎氏を悼む



京都大学防災研究所災害気候部門助手の井上治郎氏(45歳)は、昨年11月末より中国雲南省の未踏峰梅里雪山(海拔6,740 m)を目指す京都大学日中合同学術登山隊の隊長として第三キャンプ(高度約5,000 m)に滞在中、他の15人の隊員と共に、1月3日夜以降、消息を絶たれた。必死の搜索活動も空しく、何の手がかりも得られないまま、1月末、隊員全員絶望という、未曾有の事態のまま搜索は打ち切られた。折りからの異常な降雪と予期せぬ大雪崩による遭難ではないかと推測されている。

彼の突然の訃報は、学生時代から山登りや気象学・雪氷学の観測の手ほどきを受けてきた後輩であり、また共に研究の夢を語り、追ってきた仲間であった私にとって、いまだに信じられない、そして、余りにも悲しいできごとであった。

井上さんは、京大の大学院生になったばかりの1968年に、南米チリ・パタゴニアで、氷河の融氷に関わる熱収支の研究をおこなったのを皮切りに、数年にわたる名大ネパール・ヒマラヤ氷河学術調査、第22次南極観測隊(越冬)、京大パタゴニア氷河・水文学術調査のほか、いくつかの学術登山隊に加わり、多くの観測・研究成果を挙げてこられた。彼の研究は、観測が困難な山岳域や極地でのフィールド観測から新しい事実を掴もうという姿勢に徹底していた。多くの調査隊、観測隊に次々に加わってフィールドにでかける彼の姿に、「山好きのディレタント」のイメージを重ねる研究者も、一部にはおられたようである。しかし、研究の時流にも乗らず、さ

まざまなフィールドを楽しみつつ、未知の現象をあくまで調べ尽くそうという彼の研究者としての態度は、地球の自然に対する限りない愛着と純粋な探求心の具現そのものであった。真の意味の自然科学者は、彼のような“まじめな”ディレタントであるべきではないか、とさえ私は最近思っている。

例えば、ヒマラヤの氷河と気候の関係を理解するには、氷河のある5,000 m付近の長期間の気象データがなければ、まともな議論はできない。しかし、このような高度での長期観測は、大変な労力と困難を伴うものである。この高度での通年の気象観測をして、まともなデータを取ろうと主張されたのは、まだ修士課程の院生だった井上さんであった。幸いこのプロジェクトは、彼と意を同じくする名大や京大の多くの若手研究者と、樋口敬二教授という非常に良く理解者をリーダーに戴いたこともあって完遂され、結局高度4,500 mでの3年半に及ぶ連続気象データを、私達は得ることが出来た。このデータをもとに、氷河の「モンスーン型」質量収支や、ヒマラヤ特有の局地循環など、これまでの氷河学や気候学の教科書にはなかった多くの新しい知見が得られたことは、いうまでもない。

舞台を南極に移しておこなわれた彼の学位論文の研究は、氷床上のみずほ基地で自ら観測された長期間の乱流観測データを空気力学的手法で詳しく解析し、南極氷床上の地表風摩擦を算定したものである。地味ではあるが、海外でも高い評価を得ている貴重な研究である。最近、日中共同黒河流域地空相互作用研究の一員として、乾燥地域での観測にも意欲を燃やされていた。その明快かつ誠実で、人なつっこい人柄のゆえに、彼は中国側の研究者からも、非常に厚い信頼を得ていた。

いま、地球の気候に対する新たな視点から、地球のさまざまな地表面での観測的研究の必要性が再び叫ばれている。このような時期に、井上さんのような、広い視野と豊富な経験、それに人を引きつける魅力を持った貴重なフィールド科学者を失ってしまったことは、かえすがえすも残念でならない。

今はただ、彼の果たされなかった地球研究への志を継ぐことを誓って、井上治郎さんへの追悼としたい。

(筑波大学地球科学系 安成哲三)